

ぼくの小さな勇気が世界を変える

静岡大学教育学部附属浜松小学校 五年 大野 薫

この本を手にした時、なんてきれいな本だろうと思った。表紙の男の子のデザインもいい。青く光る装丁が気に入った。この本を見ているとすがすがしい気持ちになる。

「ワンダー」を読み出してしばらく、ぼくは無性に悲しかった。みんなとはちがう、ふつうではない顔、あの青い表紙の絵の男の子はオーガストだ。でも、ぼくは、オーガストの顔を本で読んでふつうではないと知っただけで、本当のところ、どんな顔なのか想像もできない。だから、オーガストの発言や考えていることを読んでみると、オーガストがふつうの子、しかもかなりまともなふつうの子にしか思えないのだ。

オーガストは、無理に人を変えようとはしなかった。そうしているうちに、人からオーガストに歩み寄ってくる。第一印象が悪いというのは、よいこともあるものなんだと思う。オーガストの見た目はふつうではないから、みんな初めは驚いてしまうが、オーガストはそれも冷静に受け止めている。そして、自分の側にいてくれる友人を心から信頼し、ゆるぎがない。読み進めるうちに、ぼくはだんだんとオーガストは立派だと思うようになった。オーガストの存在が、人の心を親切にし、友情を生み出し、まわりの人の人格を育てた。オーガストは、自分はふつうにしていただけと言うかもしれないが、オーガストがいることで学校の多くの人が変わった。見て見ぬふりをしなくなつた。そして、みんながオーガストの友達になった。

読み終えて、ぼくはその時のオーガストの学校の仲間になりたいな

と思った。オーガストを受け入れ、少しだけ余分な親切で互いを助け合うふん囲気に囲まれた、そんな空気感の中で学校生活を送り、その一員になれた人生は幸せなものになるにちがいないからだ。

この本を読むと、人はみんなきつとすがすがしい気持ちになる。オーガストが得たものの大きさ、美しさ、楽しさが心に残るからだ。そして、ぼくの気持ちはやっぱりすがすがしい。この本の題名は「ワンダー（驚くべきこと）」だけれど、ぼくはそうは思いたくない。そう、これは当たり前のこと。いつか人類が本当にそう言える時が来たらいいと思う。もし、ぼくの小さな勇気が世界を変えるかもしれない力があるのなら、ぼくも少しだけ勇気を出してみようかなと思う。驚くべきことが実際に目の前にやって来たら、ぼくもやっぱり驚いてしまふと思うけれど、それは許してほしい。

ところで、ヘンリー・ウオード・ビーチャー賞だが、もちろんオーガストにふさわしい賞だと思うが、ぼくが先生なら、学校のみんなにあげたいと思う。みんながすばらしいからね。

書名 ワンダー
著者名 R・J パラシオ
発行所 ほるぷ出版